特別講演

東北大学医学部前史

山本敏行

東北大学は本年六月で創立満九十四年であるが、艮陵（ごんりょう）同窓会（医学部同窓会）では、すでに平成四年に母校創立百十周年の記念事業を実施している。これは、同窓会では仙台に県立医学所が開設された明治五年（一八七二）五月十一日を、母校創立の日と定めているからである。

仙台には、それ以前にも西洋医学の教育機関が存在した。すなわち、文政五年（一八二二）藩医学校蘭科の創設である。この蘭科創設は大槻玄沢の力に負うところが大きい。初代学頭渡部道可は医学校蘭科について「吾藩を以て嚆矢となす」と書いている。道可は学頭就任後間もない文政七年に五十二歳で急死し、その後蘭科は廃止されてしまう。

明治五年三月、東京で西洋医学を学んでいた藩医中目斉（三十七歳）と石田真（三十五歳）は仙台に戻り、着任早々の仙台県参事兼県令心得塩谷良翰（三十七歳）に建議して、県立医学校と私立共立病院を設立する。

共立病院は明治十二年県に移管され県立宮城病院となり、医学校も宮城病院附属医学校となる。さらに、明治十六年には甲種宮城医学校および同附属医院となる。

初代文部大臣森有礼は明治十九年に中学校令を公布、それに伴い同二十年仙台に第二高等中学校が置かれ、そこに四年制の医学部が創設される。甲種宮城医学校は第二高等中学校医学部に吸収されるが、実習病院としてはその後も県立宮城病院を使用した。同二十二年医学部は片平丁に新築移転する。二十七年には高等学校令が公布され、第二高等中学

校医学部は第二高等学校医学部となる。

明治三十四年全国の高等学校医学部はそれぞれ独立し、第二高等学校医学部は仙台医学専門学校となる。同三十七年、清国の留学生周樹人、後の魯迅が仙台医学専門学校に入学し、約一年半在学する。

明治四十年（一九〇七）六月、東北帝国大学設置の勅令が公布される。これは、まず札幌農学校を母体として農科大学を発足させ、後に仙台に理科大学を開設して、総合大学とするものであった。農科大学の開学は四十年九月、理科大学のそれは四十四年一月である。農科大学の大学院学生には札幌農学校卒業の市川厚一がいた。彼は大正二年東京帝国大学大学院に留学し、山極勝三郎教授の指導でウサギのタール癌をつくる実験に成功し、後年山際教授とともに学士院賞を受賞する。

明治四十五年三月、仙台医学専門学校は東北帝国大学に吸収され、医学専門部となる。これは帝国大学に医科大学を発足させる準備であった。専門部の教員・学生は専門部が医科大学に昇格するものと思っていたが、実際に医科大学が設立されてみると、ほとんどの教員は医科大学に引き継がれず、学生も専門部とは別個に入学者募集が行われ、専門部の学生は年次を追って全員が卒業し、専門部は廃止されたのであった。

東北帝国大学医科大学の開学は大正四年である。九州帝国大学は、大学の開学は明治四十三年で、本学より遅いが、福岡にあった京都帝国大学第二医科大学を母体にして始まっているので、医科大学の開学は明治四十四年であり、本学より早い。大正に入ると、東北帝国大学農科大学を母体とし、それに医科大学を新設して札幌に北海道帝国大学を新設しようとする動きが活発化してくる。もし東北よりも先に北海道に医科大学が創設されれば、東北の地に医科大学が生まれるチャンスは失われてしまう。そのような危惧から、東北帝国大学は医科大学の新設を急いだのであった。北海道帝国大学は、大正七年に農科大学を東北帝国大学から引き継いで開学し、同八年医学部を新設している。

以上の経過を、エピソードを交えながらたどりたいと思う。

（東北大学医学部名誉教授）